

尹東柱の詩 —— 「白い影」「たやすく書かれた詩」を中心に

井田 泉

尹東柱追悼式 講演 2026/02/14 同志社大学今出川キャンパス寧靜館

昨年（2025）10月11日、立教大学キャンパスに尹東柱記念碑が建立されました。今日は、尹東柱の立教大学時代の五つの詩から二つを皆さまとご一緒に味わってみたいと思います。その前に、当時の日本の時代状況にいかに触れておくことにしましょう。

1. 尹東柱、日本留学前後の日本の状況の一端

尹東柱が日本に来る7~8ヶ月前の京都での出来事です。

1941年7月26日、黄善伊牧師（京都朝鮮基督教南部教会）ら5名が検挙された、ということが当時の『特高月報』昭和16年10月号に載っています。タイトルは「在京民族主義朝鮮基督教々徒検挙取調状況」というものです。その中にこういうことが記載されています。同志社大学神学部2年生の玉川光作（玉文錫）が説教の中でこう言った、というのです。

「我等がキリスト復活を信じ我々朝鮮民族も同様に復活すると確信するならば我等の信仰は偉大であり世の何ものとも交換する事の出来ない程貴いものとなる。」

「如何に困難なる苦境に於ても福音を伝へるのが主の御意であればこそ我等は奴隸となつた同胞のために戦はねばならぬ。」

わたしも50年ほど前に同志社大学神学部で3年間（1972~1975）学んだ者ですので、彼は30年ほど先輩に当たります。

端的に言えば、玉川光作（玉文錫）神学生は礼拝の説教で、「キリストの復活を信じることは朝鮮民族の復活を信じることだ」と言った、というのです。そのように確信するならば、「我等の信仰は偉大であり世の何ものとも交換する事の出来ない程貴いものとなる」。民族の独立を信じることこそが偉大な信仰である。彼が検挙されてその後どうなったかわからぬのですが、これは当時として許されない思想。治安維持法違反です。

「如何に困難なる苦境に於ても福音を伝へるのが主の御意であればこそ我等は奴隸となつた同胞のために戦はねばならぬ。」

朝鮮人は日本の奴隸となっている。キリストの福音を宣べ伝えることは、奴隸となつた同胞のために、つまりその解放のために戦うことだ、と説教した。これで彼は特高に検挙

されたのです。おそらく尹東柱も、公にそういう表現をしなかったにせよ、同じ願いを抱いていたに違いありません。

当時の同志社の神学部の先生方は、どういう信仰を、どういう福音を教えておられたのか。それを明らかにしなければならないと思います。

この特高による検挙事件から 40 日あまり後の 9 月 9 日、尹東柱は京都大学出身の哲学者・三木清の『構想力の論理 第一』を購入しました。彼の蔵書リストにそれが記載されています。彼が日本に留学するのはその約半年後です。尹東柱は、当時の日本の社会状況、思想状況に強い関心を持っていたことがわかります。三木清は当時、もっとも影響力があった思想家・知識人のひとりです。彼をどう評価するかはむつかしいし、尹東柱が三木清の本をどう読んだかはわかりません。三木清は日本のファシズム化に抵抗した。しかし結果的には日本国家の戦争に協力することになります。ところがそれでも彼は、共産党員をかくまつた、物質的に援助した、不穏思想の持ち主だということで逮捕され、豊多摩刑務所（現：中野区新井）に収容されました。尹東柱と同じく治安維持法違反です。彼は尹東柱が獄死した 7 カ月後の 1945 年 9 月 26 日——つまり日本の敗戦後 1 カ月以上して——獄死しました。「^{ひもの}干物のようになっていた」と伝えられます。尹東柱もどんなに痛ましい姿だったでしょうか。

この間の経緯のあらましを見ておきましょう。

1941. 12.8 真珠湾攻撃

12.27 延禧専門学校を卒業

1942.1 三木清「戦時認識の基調」を『中央公論』に発表。これが軍部、右翼から攻撃される。

4.2 立教大学文学部英文科入学

詩「白い影」「流れる街」「いとしい追憶」「たやすく書かれた詩」「春」

9.29 立教学院、設立目的を「基督教主義ニヨル教育ヲ行フ」から「皇國ノ道ニヨル教育ヲ行フ」へと変更（理事会決定）

10.1 同志社大学英文科に入学

1945.2.16 福岡刑務所で獄死

9.26 三木清、豊多摩刑務所で獄死

こういう時代に尹東柱が日本に留学し、そして獄死したことを心にとめておきましょう。

2. 「白い影」

立教時代の詩、まず「白い影」を読みましょう。日本語訳はわたしのものです。以下のハングルの原文は、今日読まれているものとは少し違うところがあります。今日読まれているものは、彼の自筆を今の標準的なハングル表記（綴り）に合わせて調整（改訂）しています。ここに掲げたものはほぼ自筆に従っています。ただしタイトルの1箇所は今日の表記に合わせました。この詩の中で一つだけ彼が漢字で書いた言葉があります。冒頭の황혼、終わりのほうにもう一度出ます。彼は「黄昏」という漢字を用いているのですが、ここはハングルにしました。詩の日付は1942年4月14日、立教大学に入ってまもなくのことです。

흰 그림자

황혼이 짙어지는 길모금에서
하로종일 시들은 귀를 가만히 기울이면
땅검의 옮겨지는 발자취소리,
발자취소리를 들을 수 있도록
나는 총명했든가요。

이제 어리석게도 모든 것을 깨달은 다음
오래 마음 깊은 속에
괴로워하든 수많은 나를
하나, 둘 제 고장으로 돌려 보내면
거리 모퉁이 어둠 속으로
소리 없이 사라지는 흰 그림자,

흰 그림자들

白い影

黄昏が濃くなつてゆく街角で
一日中 疲れた耳を 静かに傾ければ
夕闇に 移される 足跡の音、
足跡の音を聞くことができるよう
わたしは聰明だったのでしょうか。

いま 愚かにもすべてのことを悟つた次に
長く心の奥深くに
苦しんでいた多くのわたしを
ひとつ、ふたつ、そのふるさとへ送り返せば
街角の闇の中へ
音もなく消えゆく白い影、

白い影たち

연연히 사랑하든 흰 그림자들、

ずっと愛していた白い影たち、

내 모든 것을 돌려보낸 뒤

わたしのすべてのものを送り返した後

허전히 뒷골목을 돌아

うつろに裏通りをまわり

황혼처럼 물드는 내 방으로 돌아오면

黄昏のように染まるわたしの部屋へ帰ってくれば

신념이 깊은 으젓한 양처럼

信念の深い堂々たる羊のように

하로종일 시름없이 풀포기나 뜯자。

一日中憂いなく草でも はもう。

1942.4.14

흰 그림자 (白い影)、と発声しただけで、ここに「ある世界」が立ち現れるのを感じます。けれども不思議です。影は黒いはずなのに、なぜ「白い影」なのでしょう。この言葉も、詩全体もわからないところが多い。けれども今は、いくつかの言葉に立ち止まりながらこの詩に近づいてみることにします。

黄昏が濃くなってゆく街角で

東京の街角です。立教大学の近くかもしれません。日が暮れる。次第に夕闇が濃くなっています。

一日中 疲れた耳を

日本に来て、異国の、東京の言葉を一日中聞いて、ほんとうに耳も心も疲れます。尹東柱はかなり日本語を習得していたとしても、やはりここは異国。違う言葉に取り囲まれて圧迫されます。しかも、日常の中に入つて来る大声。「八紘一宇」「万世一系」「億兆一心國家ノ総力」「鬼畜米英」「撃ちてし止まむ」「近代の超克」……。

そういういかめしい言葉を横に置いて、もっと大切な何かに、静かに耳を傾ける。そうするとやがて、足音がかすかに聞こえて来ます。

夕闇に 移される 足跡の音

普通は「足音」と訳されるのですが、わたしは발자취소리 を文字通りそのまま直訳して「足跡の音」としました。かつてだれかがここ（と言っても、物理的な一定の「この場所」ではなく、どこか違う時代、違う場所を「ここ」と感じているのかもしれません）を歩いて、足跡を残した。心の目にしか見えないその足跡から、そのだれかの足音が聞こえ

る。自分の先祖のだれかかもしれない。歴史の人物かもしれない。あるいは、イエスかもしれない。過去に生きた、苦しみつつ悲しみつつしかし真実に生きた人たちの足跡から聞こえるその人たちの足音。そこからその人たちが立ち現れてくる。自分に働きかけてくる。尹東柱自身にとっても驚きです。

足跡の音を聴くことができるようになり
わたしは聰明だったのでしょうか。

それによってすべてのことを悟った。もっとも大切な何かをはっきりと把握した。すると、自分の中に大きな変化が、根本的な変化が起こってきます。

いま 愚かにもすべてのことを悟った次に
長く心の奥深くに
苦しんでいた多くのわたしを
ひとつ、ふたつ、そのふるさとへ送り返せば
街角の闇の中へ
音もなく消えゆく白い影

自分をこれまで支え生かしてきた、しかし同時に自分を縛ってきたさまざまなもの。自分の心の奥深くにずっと存在した、苦しんできた多くのわたし。それをひとつ、ふたつ、送り返す。「白い影」とは自分の分身、これまでの自分自身ではないでしょうか。けれども今、この時代に、この日本に来て、これまでのままの自分では生きていけない。

白い影たち
ずっと愛していた白い影たち、
大切な大切な自分が自分から離れて去って行く。たまらなくいとおしい。
けれども足跡の音から何かをしっかり受け取った自分は新しくされて、わたしの部屋に帰ってくる。

わたしのすべてのものを送り返した後
うつろに裏通りをまわり
黄昏のように染まるわたしの部屋へ帰ってくれば
ここに大きな変化が生じています。不安が取り去られ、葛藤が癒やされて解放された新しい自分が誕生しているようです。

信念の深い堂々たる羊のよう

一日中憂いなく草でも はもう。

この最後の 2 行は非常に重要です。

草でも はもう 풀포기나 뜯자

この言葉は、旧約聖書の預言書の言葉を連想させます。「草をはむ」。韓国聖書「共同翻訳改訂版」に同じ言葉が出てくるのです。

「狼と小羊は共に草をはみ (늑대와 어린 양이 함께 풀을 뜯고)／獅子は牛のようにわらを食べ、蛇は塵を食べ物とし／わたしの聖なる山のどこにおいても／害することも滅ぼすこともない、と主は言われる。」イザヤ書 65:25

「あなたの杖をもって／御自分の民を牧してください／あなたの嗣業である羊の群れを。彼らが豊かな牧場の森に／ただひとり守られて住み／遠い昔のように、バシヤンとギレアドで／草をはむことができるよう。 (……풀을 뜯게 해 주십시오」ミカ書 7:14
預言者が夢見る安心と平和の世界の光景。またそれを求める切なる祈りです。

また「信念の深い堂々たる羊」から「神の小羊」イエスを連想することも許されるでしょうか。十字架にかけられる前、ローマ総督ピラトの前のイエスの姿（動じない信念と沈黙）が浮かびます。聖書の言葉のみ引用して挙げておきます。

「^{ほふ}屠り場に引かれる小羊のよう／毛を切る者の前に物を言わない羊のよう／彼は口を開かなかった。」イザヤ書 53:7

この苦難の僕の姿はイエスを思わせます。

「ピラトは、この言葉を聞いてますます恐れ、再び総督官邸の中に入つて、『お前はどこから来たのか』とイエスに言った。しかし、イエスは答えようとされなかつた。」ヨハネによる福音書 19:8-9

「ポンティオ・ピラトの面前で立派な宣言によって証しをなさつたキリスト・イエス」

テモテへの手紙 I 6:13

さらに、この詩の最後の言葉「풀포기나 뜯자（草でも はもう）」は、バッハの「狩りのカンタータ」(BWV208) の第 9 曲のアリア「羊は安らかに草をはみ」とほぼ同じなのです。韓国では“양들은 평화롭게 풀을 뜯고”（直訳すれば「羊たちは平和に草をはみ」）として知られているようです。

バッハは熱心なクリスチヤンで、ルター派の礼拝音楽をおびただしく作った人です。尹東柱はバッハのこの曲を聴いていたかもしれない、愛していたかもしれない、と想像してみます。

ところで今わたしたちは、尹東柱が 80 年と少し前に歩いていた同志社大学のキャンパスにいます。見えないけれどもここには彼の足跡がある。わたしたちは彼の足跡の音を聴くでしょうか。彼の足跡の音を聴けば、彼の精神が、彼の祈りがわたしたちのうちに浸透してきて、わたしたちの中にも新しい何かが誕生するかもしれません。

3. 「たやすく書かれた詩」

「白い影」から約 40 日たった 6 月 3 日、尹東柱は「たやすく書かれた詩」を書きました。昨年 10 月に立教大学に建てられた尹東柱記念碑に刻まれたのがこの詩です。

쉽게 써어진 시

たやすく書かれた詩

창밖에 밤비가 속살거려
육첩방은 남의 나라,

窓の外に 夜の雨がささやいて
六畳の部屋は ひとの国、

시인이란 슬픈 천명인 줄 알면서도
한 줄 시를 적어 볼까,

詩人とは 悲しい天命だと知りつつも
一行 詩を書いてみるか、

땀내와 사랑내 포근히 품긴
보내주신 학비 봉투를 받아

汗のにおいと愛のにおいに ほんのりと包まれた 送ってくださった学費封筒を受け取り

대학 노ート를 끼고
늙은 교수의 강의 들으러 간다.

大学ノートを脇に抱えて
老いた教授の講義を聞きに行く。

생각해 보면 어린 때 동무를

思ってみれば 幼いときの友を

하나, 둘, 죄다 잃어 버리고

ひとり、ふたり、みな 失ってしまい

나는 무얼 바라

わたしは何を願って

나는 다만, 홀로 침전하는 것일까?

わたしはただ、ひとり沈むのか？

인생은 살기 어렵다는데

人生は生きがたいというのに

시가 이렇게 쉽게 씌어지는 것은

詩がこのようにたやすく書けるのは

부끄러운 일이다.

恥ずかしいことだ。

육첩방은 남의 나라

六畳の部屋は ひとの国、

창밖에 밤비가 속살거리는데,

窓の外に 夜の雨がささやいているが、

등불을 밝혀 어둠을 조금 내몰고,

^{あかり}灯火をともして 闇を少し追いやり、

시대처럼 올 아침을 기다리는 최후의 나,

時代のように来る朝を待つ 最後のわたし、

나는 나에게 작은 손을 내밀어

わたしはわたしに 小さな手を差し出して

눈물과 위안으로 잡는 최초의 악수.

涙と慰めで握る 最初の握手。

1942.6.3

窓の外に 夜の雨がささやいて

六畳の部屋は ひとの国、

「白い影」もこの「たやすく書かれた詩」も立教大学の便箋に書かれました。ここで尹東柱は「六畳の部屋は ひとの国」と書いています。当時、大日本帝国は朝鮮を植民地支配して日本的一部としていました。彼はこの東京の下宿の六畳の部屋で、ここが「ひとの国」であること、自分を抑圧する国であることを痛切に感じていました。

自筆を見ると、彼はこの詩の最後に漢数字で「一九四二、六、三、」と日付を書き込んでいます。「昭和 17 年」とは書かなかったのです。どうして「ひとの国」の元号を書くことができるでしょうか。当時としては西暦を書くことさえ危険なことだったと思いますが、

ここに彼は自分の意志と決意を現していると思います。

ここは自分の国ではない、「ひとの国」です。異質な国、自分を圧迫し、抑圧する国です。けれども彼は、考えに考えて、祈りに祈って、この「ひとの国」に来た。彼は自分が詩人であることの宿命を痛切に感じます。しかしかれは「運命」とは言わず、「天命」と言っています。ただ自分の意志からというのではなく、天から促され命じられて、天からの何か使命を与えられて、ここに来たはずなのです。「ひとの国」で自分の言葉で自分を自由に表現できない苦しみは、彼に自分が詩人であることをいっそう強く感じさせます。

詩人とは 悲しい天命だと知りつつも

一行 詩を書いてみるか、

一見、軽く試しに、気晴らしに詩を書いてみようか、言っているかのようにも思えますが、そんなことではないかもしれません。苦しみつつ、自分の心と体の奥深くから、言葉が生まれ出ようとしてうめく。そして生まれる一行ではなかっただろうか。

ここでわたしはふと、ハインリヒ・ハイネの言葉を思い出しました。

「思想は行動になろうとし、言葉は肉体になろうとする。」『ドイツの宗教と哲学の歴史によせて』

汗のにおいと愛のにおいに ほんのりと包まれた

送ってくださった学費封筒を受け取り

故郷の家族から届いた封筒です。自分のために祈りつつ、工面してくれている両親の労苦と祈りを感じます。

大学ノートを胸に抱えて

老いた教授の講義を聞きに行く。

おそらく、彼が受講していた宇野哲人教授の東洋哲学史の講義でしょう。

思ってみれば 幼いときの友を

ひとり、ふたり、みな 失ってしまい

わたしは何を願って

わたしはただ、ひとり沈むのか？

人生は生きがたいというのに
詩がこのようにたやすく書けるのは
恥ずかしいことだ。

この詩の終わりのほうです。
六畳の部屋は ひとの国、
窓の外に 夜の雨がささやいているが、

あかり
灯火をともして 闇を少し追いやり、
時代のように来る朝を待つ 最後のわたし、

わたしはわたしに 小さな手を差し出して
涙と慰めで握る 最初の握手。

再び「ひとの国」が出てきました。この、異質を排除する「ひとの国」の闇の現実はどうしようもなく存在する。けれども彼は希望を捨てません。

あかり
灯火をともして 闇を少し追いやり、

時代のように来る朝を待つ 最後のわたし、

시대 (時代) という言葉が印象的というか、急にやや硬い言葉が出てきた気がします。ところが調べて見ると、尹東柱が生涯を共にしていたはずの当時の聖書には、意外にも 시대 「時代」 という言葉がたくさん出てくるのです。（尹東柱当時の聖書の訳を大きくは変えていないと思われる 1956 年の「改訳ハングル版」には計 40 回。）当時の韓国語の「시대」と今日の日本語の「時代」とは微妙に意味合いの違いがあるようです。「시대」は「時」と「時代」を含むようであり、また日本語の「時代」ほど硬い言葉ではないようです。

たとえば旧約聖書の詩編第 31 編 15 節を韓国の「改訳ハングル版」で見ると
내 시대가 주의 손에 있사오니 내 원수와 펫박하는 자의 손에서 나를 건지소서
(直訳=わたしの時代は主の手にありますので、わたしの敵と圧迫する者の手からわた

しを救ってください)

尹東柱が用いていたと思われる聖書（聖經改訳 1938）の本文は

내 시대가 죄의 손에 잇사오니 내 원슈와 나를 펫박하는 자의 손에서 나를 건지쇼셔
で、綴り（と発音）が微妙に違いますが言葉は同じです。

「わが時は汝の御手にあり」

この言葉は、宗教改革者マルティン・ルターが特に愛唱していた聖句であると伝えられています。"Meine Zeit steht in deinen Händen."

時代の苛酷な圧迫の中で、この聖句を尹東柱が支えにしていたことは十分考えられます。しかし尹東柱は、今のこの抑圧の時代が永遠に続くのではなく、新しい時が来る、新しい時代が来ると信じて、それに向かって生きようとしました。しかしこの時代を耐え抜くには、命の覚悟、死ぬ覚悟が必要です。

時代のように来る朝を待つ 最後のわたし、

まるで自分の最後を受け入れる決意をしているかのようです。

わたしはわたしに 小さな手を差し出して

涙と慰めで握る 最初の握手。

今、近くには手を差し出して心を通わせる相手がいない。だから「わたしはわたしに小さな手を差し出」すしかない。けれども「最初の握手」と言っています。最初であって最後ではない。自分は最後を迎えるかもしれないけれども、差し出す彼の手は人を、相手を求めている。今は自分で自分に握手するしかないとしても、やがて来る時、新しい時代には、多くの

人と握手したいと願ったのではないか。尹東柱は今、握手しようとしてわたしたちにも手を差し出しているのではないかでしょうか。

80 年あまりを経て、再び闇の時代が来ようとしているかのようです。高市早苗首相は「スパイ防止法」の制定を自民党・維新連立政権の重要政策の一つとして位置づけており、その実現に意欲を示しています。これは治安維持法の再来という危険はないのか。尹東柱の死を悼み、その珠玉の詩を愛する者として、今の時代をしっかり見究めていかなければならないと感じます。